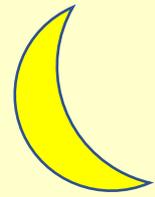


朔太郎と「音楽」



「僕は子供の時から、病的に近いほどの音楽好きであった。幼児の時には、毎日オルゴールの玩具ばかりを鳴らしていた。（中略）少年時代には、手風琴やハーモニカばかりを弾いて日を暮らしていた。」（「音楽について」）

音楽学校の大学受験まで考えたという萩原朔太郎は、旧制中学時代に当時新しい西洋楽器であったマンドリンを手にしました。そして、上京間もなく、比留間賢八らにその演奏を専門的に学んでいます。前橋に帰郷後も、マンドリンの演奏グループを組織するなど、生涯に亘り音楽を楽しみました。晩年は長女・葉子とギター・マンドリンの二重奏を楽しんだといえます。

「私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章では言い現しがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによって表現する」（『月に吠える』・「序」）朔太郎の詩のリズム感は、彼の音楽体験によって培われたのかもしれませんが。

* 手風琴（アコーディオンのこと）

* 旧制中学校（現在の高等学校の段階に相当する教育を行う学校で、第二次世界大戦後の教育制度改革が行われる以前に存在した。）

* 比留間賢八（ひるまけんぱち 1867～1936 明治・大正期の音楽家。日本のマンドリン音楽の先駆者）



写真提供：前橋文学館